

縄文中期の集落

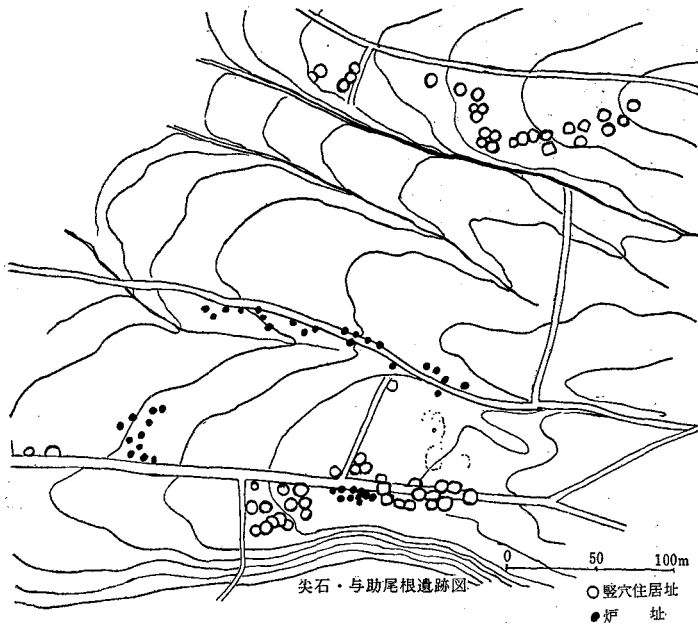
三友 国五郎

最近各地における発掘の結果、縄文中期の集落について様相も明らかになってきた。けれども広汎な遺跡発掘が困難であること、住居址の編年が困難である上に家の寿命が短いことから、ある時の断面として捕える事はむづかしい。したがって縄文中期の村と限定しても、中期の遺跡を全部とりあげることとは不可能で、代表的な遺跡を若干とりあげて、当時の集落、生活の一端を探ぐって見るだけである。

尖石と与助尾根遺跡^①

日本の縄文中期の代表的遺跡として、尖石をあげる。同遺跡はいうまでもなく、宮坂英弑氏が二十数年の長きにわたって、心血をそそいで発掘した遺跡で、先史村落の姿を語っている。八ヶ岳の西側山麓海拔千米の丘陵上に、天狗嶽の爆烈によって生じた泥流がある。この景勝地点の南傾斜の中段に三角錐形の巨石尖石がある。この附近が尖石遺跡である。台地の南北は、中約百米のV字状の谷でくぎられている。巾三百米の丘陵をなして、西にゆるく傾斜して、約三軒でこの台地はなくなる。この台地に谷をへたてて北側にある台地が与助尾根で、東西二百米、巾五十米の地域を占めている。

尖石では三三ヶ所の堅穴住居址が、与助尾根には二八ヶ所の堅穴住居址が発掘された。両遺跡とも、遺物遺構から



第 1 図

縄文中期にぞくする単純遺跡と推定されている。

堅穴住居址の形は、隅丸方形のものが一二例、円形のもの二〇例、楕円形のもの三例、その他不整形のものが九例で方形は一例もない。楕円・円・隅丸方形が正常形で、これが縄文中期の住居の特色と通じている。

住居址の大きさと深さを見ると直径四米以下が五例、四米台のものが一七例、五米台が一七例、六米以上は五例である。最小は第一三号の一・三米、最大は第三一号が六・九〇米、一般に径四〜五米台が多く、これがこの台地の住居址の大きさである。

この遺跡で注目すべきことは、石壇と埋甕である。第二八号址には中央に口径四五糎と一五糎の底部の欠けた土器が口経を地床面と平に埋めてあった、そして土器の東と北側には各々石

がしいてあった、全体があたかも祭壇のような恰好であった、或は炉をめぐった座席かも知れない、与助尾根第七址では石囲の炉址の北側から北壁まで七五種の狭い空地に、西よせて石壇が設けてあった、そして中央に角柱状の石一基が樹っていた。石壇の周囲から装飾土器が三個が、石棒に対して供えられたような状態にあつて、明らかに石壇が祭壇として構築されたものである。この様に石壇のある住居址として、与助尾根の一五一七号の住居址が認められる。崇拜の対象であつたのであろうか、その周囲には装飾的土器や美麗な磨石斧があつた。与助尾根第四号では北西隅の支柱穴の前に一基の完形有頭石棒が倒れて、その周囲から土器石器が出土した、この石棒はかつて、支柱を背にして直立していたものであろう。与助尾根第八号では土偶の首部を臆置してあつた土器が存在したこともある。石壇と埋甕とが関係あるかの様に思われる。これらの資料から家屋内の北西隅の位置が重視されたい事が推定される、それが尊崇によるか畏怖によるか、何れにせよ、これらの資料の発見された住居址は径四米乃至五米の比較的小規模で、その構築は丹青をこめた整然たるもので、その伴出土器、殊に埋蔵土器はことごとく、縄文中期の末期にぞくするものであつた。

住居址の他に、特殊施設として、小型の堅穴が発見される、直径およそ一米、深さ一米内外の平面円形で、直壁平底で赤土層深く穿たれたもので、これは単独に、時には五・六個づつ相接近し、或は重複して発見される。独立堅穴のうちには住穴らしいものもある。これは屋外の貯蔵庫か、或は墓穴かとも推定されている。とにかくこうした特殊施設が集団的に発見されることは中期の特色である。これらの住居址は形状及び炉址の構造、出土した土器類から次の三つの形に分類することができる。

第一形式は径四米内外の不整楕円もしくは円形で、中に石囲または埋甕した炉址がある者、第二形式は六米以上楕

円形、床の中央に小規模の炉址があるもの。

第三は四―五米の円形又は隅丸方形、丹念な大型の堅炉がある、石壇や埋甕石柱等をもったよく整備されたもの。この編年的に基準した住居形式によって、集落の形式を考えると、縄文中期に出発して、中期に繁栄し、末期に至るに従って、台地の南斜面から東端にかけ住居が軒を並べるようになった。末期には住居址の柱数が多数あって、住居の改築や増築したことがわかり、重複した住居址群のあるのが見うけられる。与助尾根に比して、長年月を経過したものである。与助尾根の住居址は柱穴数も相近似し、各住居とも殆んど同時代に構築されたもので、比較的短期間のものである。

尖石では住居の配列は地形に制約されながら南向きに構えている。これを南区とすれば、その北方の谷間の斜面に約20の炉址と住居址一を発掘してこれを北区とすることができ、昭和五年に発掘された西方にも地床炉址と多数の遺物が発見されているので、一つの西住居地区が想定される。これらによって尖石は中央の高地区をめぐって、三つの住居区が認められ、中央には広い地域を占める特別遺構の地区があった。即ちここには径一米深さ一米の円形直壁平底の堅穴が近接して一連の堅穴群をなしているし、大形甕形土器が広場に単独で出上したり、自然石を目印のように並べてあったり、いわば共同的社会的と思われる地区が介在している。

縄文中期にもなると、石壇をもった家、土隅や埋甕等の特殊構造をもった家がでてきた。何もない普通の家と、組み合せて考えて見ると、村落内部の人達の間若干の差を認める事ができる。縄文前期の村々には、この様な住居の内部構造に差異はみられなかった。

堅穴住居の分布や住居内部の構造、遺物の状況等から判断してみると、村落内の結合が進行しつつある事が推定さ

れる。このような村落内部の結合の紐帯が村落全体結合の場として、広場的な場所を要求するに至ったのであろう。

こうした傾向は与助尾根の遺跡でも認められる。即ち南斜面に二八ヶ所の住居が集团的に東西に並び、特殊構造をもつものは、夫々住居群の中心的位置にある。北側の平坦な場所には、住居址が一つも認められず、四ヶ所の堅穴が発見されている。なお多数の堅穴の埋没する事が予想される。住居址の形式からみて、比較的短期間のものと推定されている、炉の構造から堅穴炉が十例、石囲炉が十二例であるので、これを一応与助尾根のある時期の家の数を示すことにすれば、石囲炉の家が最大十二戸・堅穴炉の家が最大十戸、これらのものが同時にあったとは思えないから、十戸〜七戸の村を想定する事ができる。

尖石では堅穴炉八例、石囲炉は八例であるが、重複したものをのぞけば七例である。完全な石組炉は五例しかない。したがって五戸〜七戸の村が想定できる。

さて与助尾根と尖石遺跡との集落が、同じ時代に、相接して存在していたことは、すでに村落社会が、単なる自然的なものでなく、村落共同体を構成していたと考えられることである。まだ農耕社会ではない、採集生活の時代に、この地域がいかにか天与の恵みにめぐまれていたとしても、これだけの人口をささえるために、社会組織の集約化に求めなければならぬと思う。

大体の人口は径四〜五米の住居の収容人員を四人とすれば、尖石では二十人〜二十八人、与助尾根では二十八人〜四〇人が推定できる。

平出遺跡^②は松本平の南端奈良井川扇状地にあつて、木曾山脈の麓にある。奈良井川につくられた洪積層台地で十数米におよぶ円礫層の上に三〜四米のローム層、その上に里土層が堆積して農耕地をなしている。ここに縄文住居址

(一七)土師住居址(四九)が発掘された。それをを編年別に見ると、

勝坂式直前(1) 勝坂式(4) 勝坂加層利E併存(6) 加曾利E式(5)

特殊なものとして、地表下約三〇厘のローム層面につくられた配石遺構で、東西三五米、南北三米、中央部に八箇の石で、矩形に囲んだ炉があった、これを基点として弧状にのびる配石列があった、何の目的であるかわからないが、集落にふざいしたものである。さてこの遺跡は勝坂から加層利Eの長期間にわたるものであるが、住居址の数から四〜五戸の村が推定できる。けれど尖石とちがって、トレンチによつたものであるから、他に発見される可能性はある。土偶や石棒をもつた家を図上にマークすれば、村の中心的位置にある。既に単なる自然村ではなく、中心に結ぶ集団であることが推定される。このような村ができるために、それを育てる基盤がなければならぬ。信濃甲斐の山岳地帯に遺跡地が豊富であることによつて、こうした村落が発生すべき情勢が熟していたのであろう。それは狩猟を中心とした、強固な集団が組織されていたことが遺跡分布から推定される。こうした地域集団が各地に成長していったことは、信濃各地域に特色ある形式を生みだした土器の分類によつて知ることができる。加曾利Eをとりあげてみると、全体として加曾利Eの特色をもちながら、地域的には夫々の差があつて、考古学者はこれらの地方土器を次の様に分類している。

第一類 中南信地方に多く、北東信地方にすくない。とくに尖石・平出に多い。

第二類 第三類は中南信に多い。

第四類 五類 六類・七類は北東信地方に多い。八類・九類とこまかに分類されている。この様に多く分類されるのは編年と地域差が組みあわせられるからであつて、逆に云えば地域毎に形成される社会構成及び、組織が多少づつち

がっているからであって、各地方毎に地域集団の成立を語っているに他ならない。

中期の遺跡群が長野山梨県の特に八ツ岳山麓に多いのは、自然条件にめぐまれていたからであろう。狩猟の生活に基礎をおき、トチ・クルミ、栗等の各種の植物食料を採集したであろうことは、遺跡地が高原上に集っていることでも考えられるし、石鏃石槍打製石斧の多いことから推察される、一部の学者が農業の存在を認めるのは、原始農業に対する考え方の差異にあるにして尤なことである。

こうした環境にめぐまれ、それが地域集団の発展をうながし、集団の確立によって、新しい集団社会を生み出していった。新しい文化を生む力は地域の内蔵する資源とそれをひき出す集団の力である。

貝塚と集落

関東地方には環状にぎっしり貝類のつまった大貝塚が多い。又環状をなす前の段階にある小貝塚が円形に又馬蹄形状に分布しているものが多い。そしてこれらの貝塚の下には住居址が発見される。家の分布も、貝塚の形状によって大体推定できる。円形に或は馬蹄形状に配置される。これが計画的に配置されたものか、それとも、遂次たてられて、馬蹄形状から環状になったものか、判然しない。それが問題の要点になっている。和島氏は^⑧計画的につくられたと説いている。神尾氏はこれを地形に即して円形乃至馬蹄形状に配置されたとのべている。それではこれら関東地方に多い環状貝塚について考察するとしよう。

横浜市小仙貝塚は大きい貝塚が四つ、中位のが二つ、小さいのが八つからなっている。小さい貝塚を一つの住居址、中位のを二つ、大きいのを数個内外の重複したものとすれば同一時期にある家は四戸以上の家からなりたっていたと考えられる。埼玉県北葛飾郡栄光院貝塚は、小貝塚が三つ、大貝塚が一つからなっている。(環状貝塚の半

分にあたる分)、そこには数戸内外が集っていたのであろう。この二例は環状貝塚のできる前の姿であらう。

千葉市台門荒屋敷・草刈場貝塚^⑥は一つの大きく南にはり出した舌状台地の上、二百米乃至四百米前後の接近した間隔において、南北に並んでいる。それぞれ別個の支谷に面して開口する大規模な馬蹄形状貝塚をなしている。

又大宮町月之木貝塚と辺田貝塚も並列する二つの舌状台地の上にあつて、細長い谷が入りこんでいる。

月の木貝塚^⑦の調査によると、環は北方に開き中央部は最も低く、環の南端が最も高く、比高は三米を算し、外径は一・一五米から一五〇米、幅は平均二三米、貝層は緩傾斜をなして、盛上っている。この環内にある貝層の深さは一・二〇〜一・四〇米、環の内側の貝層は中央部に向つて浅くなり凹地では全つく消滅する。この貝塚の南端三畝を発掘した結果四個の楕円形堅穴を得た。堅穴のある所は深さ一米前後、住居址のない所は四〇〜七〇糎で、これを基準として、全地帯にボーリングを試み、深度を調査した結果堅穴は凡て環内にあること、堅穴は勤くとも五六個を下らないこと、中央部には全然ない。貝層下土層即ち石器時代当時の地表面は環の南端から開口部に向つて僅か傾斜していること、中凹部は急に低く、且つ円形をなして人工的にほりさげたと推定される可能性が多い。前記完掘した堅穴の出入口は何れも中央部に向つていこと、未発掘の堅穴も同様に出入口が中央に開いたであらうと武田氏は述べている。この様な発掘例がもつと多くあれば環状貝塚は計画的に家が配置したといえるが、現在のところではこれ以上のことは云えない。堅穴址が五六個以上もあつたからとて、これが同時にあつたわけではない。発掘した四個のうち三個までは重複しているのでこの割合であつたとして、一四戸が最大であつたのであらう。

草刈場貝塚の場合は加曾利Eから堀之内、加曾利Bに及ぶもので、環の規模は最大径五百米に及ぶ大遺跡で、貝層の範囲は月の木貝塚に比してずっと大きい。且つ環が厚い点から、長期間に及ぶ集落址である。酒詰氏^⑧は本貝塚の

戸数について、中央部には貝層はもとより土器すらなかった、住居址も人骨も悉くこの土手の内外及び頂上部から発見された。この環内に六―七戸の家が並列したものであるうとの述べている。

姥山貝塚は直径一五〇米の環状貝塚で、中央は径五〇米の凹地である。三百坪の発掘地に二三個の堅穴を得た。総面積四千坪であるから、全地区この割合であるとすれば老大な数になるが、実際はそんなに多いはずがない。住居址は方形、円形、楕円形と各種ある。直径二米以内の小堅穴もあるし、倉庫もある。ちがった形式の住居址が同一面にあるところから考えると、まだ形式の定着がなかったのである。A区では7、10、12の堅穴が、お互に切りあっている。同時的存在は考えられない、1と10が同時にあった可能性はある。B区では1、2は同形式で8は異なるから、且つ1、2は距離が8米へだっている。A区では1、2は同時にありうることになる。A区が2戸、B区が2戸存在したとして、その十倍が姥山の戸数とすれば四十戸になるが、これは最大の場合で実際はずっとすくなく、阿玉台から堀之内の長い間の村であるから、仮りに $\frac{1}{3}$ とする十数戸となる。

次に環状貝塚として知られているのをあげて見ると次の様である。

千葉県東葛飾郡、荒海・姥山・中沢・古作

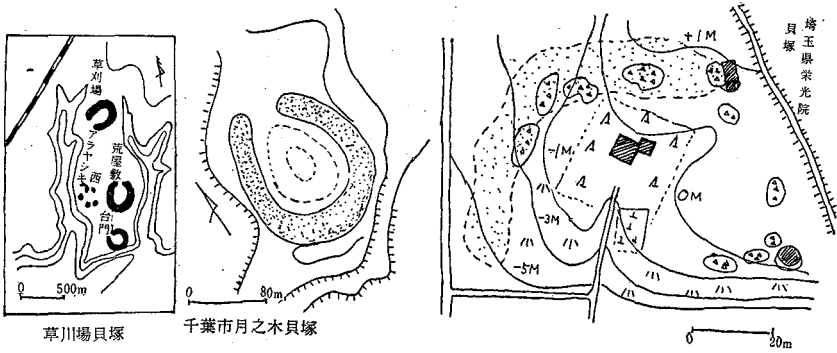
千葉郡及び千葉市 横橋・長谷部・平山・高田・長者山・東寺山・草刈場・荒屋敷・台門・辺田・月之木・矢作・

加曾利E

市原郡君津郡 六通・門前・西広・山倉・山野

埼玉県北葛飾郡 栄光院・大宮耕地・宝珠花

利根川下流地方では



第 2 図

千葉県 良文・阿玉台・白井大宮台・木の内

茨城県 陸平・宮平・竜貝

白井大宮の貝塚は舌状台地の周辺をめぐって東西北の三方の斜面に五ヶ所堆積している。この貝塚では貝層の下に住居がみとめられないのは、どうゆうわけであろうか。東京湾岸のと趣を異にしている。けれども恐らく各戸が家に近い崖の斜面に貝をすてて行ったものであろうから、大体の家の配置はわかる。

この様に環状貝塚は圧倒的に関東地方に多い。日本の他の地方には殆んどないといってもよいほどである。現在では岩手県の大船渡市の蛸之浦貝塚が知られているだけである。同貝塚は中期の大貝塚で、大船渡湾の入口近い台地上にはほぼ環状に貝層が分布している。貝層下に、西村氏^⑥は住居址を発掘している。さらに堅穴内にある積石の下に一体の屈葬人骨が発見されている。廃屋になった堅穴が墓地として利用されたのであろう。貝塚が西日本にすくないのは、調査が不十分であるためか、貝塚の形状面積の再調査必要がある。それによって或る程度の欠を補うことができるが、それにしても大貝塚が西日本にすくない。これを無批判に自然条件のみに帰してよいものであるか。

東京湾の貝塚の分布を見て、何故千葉県に多くて、西側の埼玉県東京都にすくないのであろうか、それは自然条件だけであろうが、当時の東京湾は、千葉県側に深く侵入していたが、埼玉県側ではすでに陸化作用が進行して、海は後退して、貝塚をつくることができなかつた事は認めるが、それにしても違いすぎる。貝塚はなくとも中期後期の遺跡がもつとあつてよいはずなのに、すくない。そして西部山麓地帯に中・後期の遺跡集団が多くなっている。この様に遺跡の分布が不平等なのは、遺跡集団の移動も考えられるので、自然条件だけでは説明しきれないと思う。

千葉県側に中後期の遺跡が多いのは、めぐまれ自然に基礎をおいた、集団が、自然条件のよさめのために、自律的に繁栄し、より強力な地縁団体を形成したからであらう。自然のよさは集団をひきよせるが、集団を發展させるのは、自然でなく、人間の集団の力である。

集落をめぐる海面の状態を見ると。そこはハマグリ・アサリ・シオフキ・キサゴ・ウミ・ニナ等が好んですむ浅海砂泥性の内湾で、干満の差が烈しく、干潮時には汀線上に長時間砂泥がさらされる波静かな溺谷の奥までつづいている。同時に広い猟場もあつた。加曾利貝塚からは鳥・鹿・猪・猿・タヌキ・アナグマ・鯨が多量に出土している。長者山・辺田・栄光院貝塚でも莫大な頭数にのぼっている。これは集落と猟場との関係が不可欠であつたことを示す。魚撈海面が共用されたように、狩猟場も共同であつたらう。でなければ、台門・荒屋敷・草刈場の大貝塚が一つづきの舌状台地上に接近して成立する筈がない。どうしても地縁団体として共同体組織の強い集団を考えねばならぬ。

こうした集団の核が千葉県の自然環境に大きくはぐくまれたから、多数の大遺跡が立地したと云える。埼玉県東京都側の奥東京湾岸には縄文前期の貝塚が多数あつたのに中後期になる、殆んど貝塚はなくなつてしまつた。台地上に

遺跡をなしているだけである。群集的な地域は西部の武蔵野台地、山麓地帯にうって、狩猟を中心とした生活であった。集団の興廢、移動があったことを示すことになる。

狩猟集団と漁撈集団

横浜市^⑧附近には勝坂式の遺跡が多数あるが、そのうち貝塚をなすものはない。多数の狩猟具石鏃石槍打石斧石棒が発見される。彼らは海岸にあっても貝塚を残さなかった。彼らは完全な狩猟集団であったことがわかる。

これより少し前か同じ頃のととして阿玉台期がある。阿玉台の中心は茨城千葉両県下にのみとめられるが、この遺跡は貝塚をなすものが多い。この阿玉台が横浜附近では三浦半島から金沢附近にかけて貝塚をなして群集的に発見される。この二つの集団が相接して横浜附近にあるが、勝坂式は台地に狩を中心として、阿玉台は海岸に貝塚をなして、はっきり集団生活の違を示している。恰も台湾の蕃族が山岳民族が山岳地帯に海岸民族が海岸地方にわかれて、生活しているように、横浜市附近において、同じ時代に別々の地域集団をなしていたことが、遺跡分布の吟味から推定できる。阿玉台式勝坂式という土器の編年は、同時に地域集団としての秩序を示すことにもなる。

次に加曾利E式になると横浜附近でも数が圧倒的に多くなってくる。この遺跡は貝塚をなすものが多い。しかし海岸にあるわけではなく、相当に貝類採集の行動範囲が広くなつて、他の遺跡を通りこすものもある。

これらの集団の中にあつて、称名寺貝塚^⑨は砂丘上に数群の貝塚からなりたつてゐる。おびただしい魚骨やうろこの層、マグロ・タイ等様々の魚骨が堆積していた。だが獣骨はまれにしかなかった。それに多量の骨格器と未完成の材料である鹿角が多く発見されたが、鹿の肢骨や顎骨類はまれなことから、魚類と鹿角が交換されたのであろうと吉田格氏は報告している。すでに交易交換がなりたつたとすれば社会構成はより複雑になつて、遺跡を単位とする専業

の存在すら予想される。協同体として集団はいよいよ強固に形成されていった。遺跡地が集团的に分布するものもこの故である。こうした事例は日本各地至るところにある。私達が遺跡をたつねると、或る地域には同系統の遺跡が群集しているのに、谷一つ越しただけで、自然条件も大体同じであると考えられるのに、発見される遺跡は全然別系統であったり、或は全然遺跡のないような場合もある。どうしてこの様に差異があるのであるかと驚くほどである。

その実例として、九州地方の場合を見てみよう、九州縄文後期の形式に指宿式・市来式・御領式というのがある。^⑧市来式は不思議なほど海岸地帯にあつて、内陸には殆んどみられないほどである。海岸近くの砂丘に、海岸段丘上に、又は河川流域にある、だが貝塚をなしているものは稀である。薩南諸島の屋久島・口永良部・甕島・種子島でも、この市来式遺跡が主流をなしている。極端に云えば海洋民族とでも云うほどの遺跡分布を示している。大口盆地は各種の遺跡が豊富に発見される内陸盆地なのに、この市来式はみられない。

これに対して指宿式は薩摩半島にも発見されるが、主流は宮崎、鹿児島、山岳内陸地方に多く分布している傾向が強い。市来式が海洋民族であるならば、指宿式は山岳民族とも云えるほどで、伝説にでてくる、隼人、熊襲の存在を実証しているかの様である。熊本地方を中心として御領式というのがある。これは縄文後期のものであるが、南九州にも、一般的に発見されれば問題はないが、この御領式が、熊本附近にのみ濃密に分布して、他の地域にはすくない、北九州南九州ではその分布が急に減少しているのみでなく、その遺物内容を見ても、熊本を中心とした御領式はその遺跡数の多いことと共に、中核的姿を示しているが、南九州の御領式は遺跡数もすくなくなり、遺物も貧弱で、場末的な感じが深い。これより前の市来式がすばらしい遺物を残したのに対して、いかにもみすばらしい。

こうした現象は市来式は南九州の海岸に中心があつたが、御領式は、中心がなく、場末地帯、辺縁地帯であつたか

らで、狭い地域で弱い力で統率されている集団では、文化も組織もそだちようがない、したがって遺跡数も少く、内容も貧弱なのである。

結局私のいいたい事は、自然のみでなく、それより強力に集団の力が遺跡の分布に影響しているのだという事である。

- ① 宮坂英弼 尖石 昭和三二年
- ② 平出遺跡調査会 平出 // 三〇年
- ③ 和島誠一 横浜市史
- ④ 武田宗久 千葉市誌
- ⑤ 酒詰仲男 地形上より見たる貝塚 考古学雑誌三七ノ一
- ⑥ 西村正衛 世界考古学大系 縄文中期文化
- ⑦ 吉田 格 称名寺貝塚 一九五一総会発表
- ⑧ 三友 薩南諸島の先史地理的調査 埼玉大紀要(一九五三)

集落に附属した特殊遺構

中期後期の遺跡には特殊な遺構が多い。これは漸く社会が複雑になって、物心両方面において、私達の思いも及ばない事が行われ、集団の強化が進んだからである。

那須野の中央津雲川谷にのぞむ台地縁にある遺跡で、ローム層に小竪穴群がある、到底住居址とみることはできない。柱穴の類は竪穴の外にあるのが普通である。池上氏^⑨は竪穴・炉柱穴と別々にとしている。竪穴は径一、七米内外、底に至るに従ってひろがり、底はふみかためられて、特別に堅く、青砂がしかれていた。倉庫貯蔵用のためと推

定される。尖石でも小竪穴群のあつことは前に記した通りである。或いは墓地であるといい或は倉庫であるといい定説はない。或は現在日本各地の農村にある。出作り小屋的なもの、湖東地方にあるホシ小屋の如きものとも考えられ、夫々の場所によって用途がちがっていたものである。何れにしても、こうした遺構は集つて発見されるのが普通で、集落に関係した施設であることは間違なく、集団として発見されるところに、その意義を認めざるを得ない。配石遺構も最近各地に発見されつつある。^⑩これには環状列石や各種の組石遺構がある。石を使用した住居址も加えてよい。今日の研究ではこれらの遺構がどんな目的でつくられたかが明確でない、地域地域によって違っている。

北海道では河野・駒井両博士によって、ストンサークルのうち積石のあるものは、墓壇をなしているものが多いことが判った。しかし奥州から中部近畿地方にわたって、本州東半で発見される環状列石には墳墓として証拠のないものが多い。秋田県大湯遺跡では環状列石に立石として使用されたもの、大小の河原石などが、色々の形に配列してあつた。岩手県上市樺山遺跡では大きい河原石が環状をなし、中央に柱穴のような穴があつて、立石のあつたことも想像される。栃木県船生村。深谷市では小沢国平^⑪が調査された、八箇の組石を報告しているが、立石施設と思われるもの墓壇と推定されるものもあつた。縄文後期の遺跡である。何れにしても配石遺構のうちには墳墓もあつたろうし、祭壇的なもの、立石的なものもあつたであろう。そしてそれが集団で発見されるところに意義がある。

東京都草花の遺跡は、配石ではないが、中央に径十米位の台地をかこんだ、竪穴住居址が発見されている。これ等は全く特殊な例で、部落の集会場とも思えるし、或は祭壇的なものと考えられる。何れにしても社会的公共の施設と考へるべきであろう。

関東の山岳よりから山梨・長野に多い敷石住居がどうして、この地方に特別に多いのか、竪穴から平地住居への転

換期のものならばもっと全国的に発見されるべきであろう。地域集団の伝統として再吟味する必要がある様に考える。

⑨ 池上啓介 栃木県狩野村槻沢石器時代住居址報告 史前学雑誌七の六

⑩ 江坂輝弥 考古学ノート 先史時代Ⅱ

⑪ 小沢国平 深谷市桜丘遺跡 昭和三十一年